

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ミュージック研究の挑戦：  
「音楽」のリアルな姿に迫るために：共同研究：  
音楽する身体間の相互作用を捉える：  
ミュージックの学際的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野澤, 豊一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00008478">https://doi.org/10.15021/00008478</a>

# ミュージッキング研究の挑戦 —「音楽」のリアルな姿に迫るために

文  
野澤豊一

共同研究 ● 音楽する身体間の相互作用を捉える—ミュージッキングの学際的研究

## 文化人類学にとって「音楽」とは何か

日本の文化人類学のなかで音楽が占める位置はかならずしも大きくない。最近では変わってきたようだが、ひと昔前までは、日本文化人類学会の研究大会などで音楽や芸能関連の口頭発表を聞こうとすれば、地域ごとに編成された発表会場を次から次へと駆け回るのが当たり前だったし、時に複数の発表が別々の会場で同時に進行していたりして悔しい思いをしなければならなかった。私自身も大学院生時代、日本におけるブラック・ゴスペル歌唱集団の実践や米国黒人教会の音楽的儀礼についての口頭発表をした際、思うような聴衆を得られず歯痒い思いをしたおぼえがある。

では、文化人類学者にとって、音楽など大した意味をもちえないのだろうか。あったとしても、せいぜい鑑賞する対象としてのそれではしかないのだろうか。そんなはずはない。フィールドで歌や踊りといった音楽的实践に出会う人類学者は、自分の調査している社会において歌い踊る行為がどれほどのインパクトをもつか、よく知っているはずだ。ために、文化人類学者の古典的な関心事である共同体の儀礼を考えてみよう。歌や踊りや楽器演奏、それらに関連した「原音楽的」とでも呼びうる行動をまったく含まない儀礼というのは、むしろ想像しづらいはずだ。であるならば、音楽はある意味で「共食」に匹敵するほどに、社会的存在たる人間にとって根源的な役割を果たすのではないか。

にもかかわらず、人類学者は音楽について語ることをあえて禁欲してきた歴史がある。アメリカの民族音楽学者ブルーノ・ネットルによると、アメリカ文化人類学者よりも（ラドクリフ＝ブラウンの影響下にあった）イギリス社会人類学者の方がその傾向が強く、たとえばレイモンド・ファースは、ティコピアの音楽についてかなりの調査ノートを残しているながらも、それらを発表したのは主著を上梓した何十年ものちのことであった。ネットルはまた、ジークフリート・ネーデル、オスカー・ルイス、ポール・ボハナンといった著名な人類学者たちの名前をあげて、彼らが人並み以上に西洋音楽のパフォーマンスに精通していたにもかかわらず、人類学者としての仕事のなかにその片鱗を示さなかったことを指摘する。そして、人類学の教科書でいまだに音楽を扱うことが忌避されがちなのが、このあたりにあるのではないかと推測するのである（Nettl 2010: 120-128）。

人類学が音楽を避けるのは

なぜだろうか。すぐに思いつくのは、音楽という文化的表象がきわめて特殊な記号体系によってしか記述できないという近代的な約束事に、人類学も捉われているという可能性である。そうでなくとも、人が音を奏でたり踊ったりする場面を記述するのは困難だ。というのも、人類学者がフィールドで出会うのは、「歌唱」「踊り」「熱狂」等々が入り混じった出来事の全体、言い換えると、音に媒介されつつ複数の身体が交感する場面やそれによる感情の伝染といった出来事の全体だからである。ここには、音楽を伴う出来事の重要性はわかるがそれを音楽として語るには限界がある、というジレンマが看取できる。

## 「音楽」から「音楽すること」へ

しかしこのジレンマは、クリストファー・スモールによれば、音楽という近代的概念に捉われているために起こるにすぎない（スモール 2011）。私たちは音楽という「モノ」がリアルに世の中に存在すると思込みがちだが、それは、楽譜やレコードといったモノとしての媒体が誕生したあとに一般化した概念にすぎないからだ。

音楽とはモノではなくて人が行なう何ものか、すなわち活動なのだ。一見疑いなくそこにあるように見える「音楽」という概念は実は作り物であって、これは音楽を生み出すあらゆる活動や行為の抽象概念でしかない。その証拠に、抽象概念としての「音楽」にじっと目を凝らしてみると、そこにあったはずのリアリティはすぐさま消えてなくなってしまうだろう（スモール 2011: 20）。

スモールは、音楽という近代的な概念が発明されて以来私たちが見失いつつある、活動および行為としての音楽の相を復

権させるべく、musicizing という造語を提案した。musicの動名詞形にあたる「ミュージッキング＝音楽すること」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。本共同研究は、スモールの提案を受けて、音楽実践が行われる場面の記述や分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へと拡張し、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを、音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目指して企画され



金澤八幡宮伝統掛唄大会で熱唱する歌手とそれをカメラに収める人々（2016年9月、秋田県横手市金澤八幡宮、梶丸岳撮影）。



米国黒人教会の礼拝で聖歌隊とそれを指揮するオルガン奏者。彼らの歌が信者のトランスダンスを誘発する（2012年5月、ミズーリ州セントルイス、野澤豊一撮影）。

たものである。

ミュージッキングという概念が世に問われてからすでに20年以上たち、この言葉もさまざまな文脈で使われるようになったが、まだそのポテンシャルが十分に発揮されているとは言いがたい。他方で、ミュージッキングをキーワードに、音楽や踊りが人類にとってもちうる意味を幅広く討論する準備——文化人類学もその中心の一つとなりつつ、領域横断的な議論を行う準備——が、現在できつつあるように思われる。そう主張する根拠は、おもに次の2つである。

1つは、おもに進化論や認知心理学の知見に端を発し、人文社会科学一般にとって基礎的な重要性をもつようになりつつあるコミュニケーション理論が、ミュージッキングに普遍的かつ積極的な意義を認めていることである。それによると、集団的な歌唱や踊りはもちろんのこと、母親が赤ちゃんに話しかけるときのイントネーションやリズムに富んだ言葉も「音楽的」である。そして、それらの音楽的なコミュニケーションこそが、言語や概念以前のレベルで感情を伝達したり、集団への帰属意識を生成したりする（ひいてはそれが「共感」や「心」を準備する）のに不可欠だ、というわけである（ミズン 2006）。ミュージッキング研究の機が熟したと考えるもう1つの理由は、映像記録技術の発達である。フィールドに小型のビデオカメラを持ち込めば、調査地で繰り広げられるミュージッキングから、「音楽」だけを抽出する必要はない。映像には、前言語的で感情的な身体のやりとりを含む、出来事のほぼ全体を捉えられるポテンシャルがある。

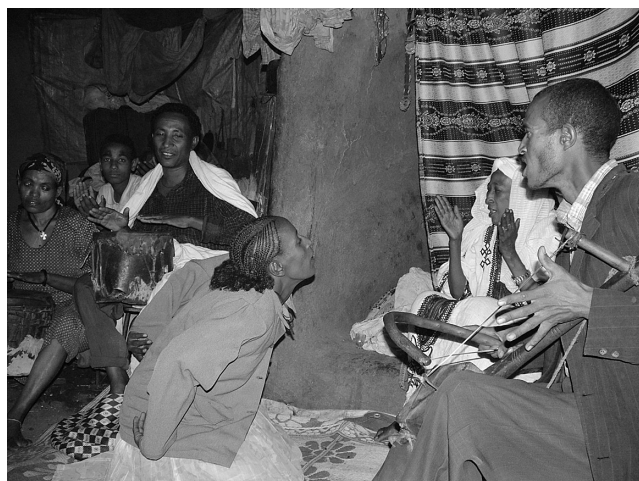
### ミュージッキング研究の輪郭

以上を踏まえると、本共同研究の掲げるミュージッキング研究が、単なる音楽の研究ではないということが、おのずと理解されるだろう。複数の身体が交感するコミュニケーションのダイナミクスを探求する営み——そうしたものとしてのミュージッキング研究を構想することが可能である。

以上の構想を具体化させるために、本共同研究には多様な背景をもつ研究者が参加している。研究分野としては、文化人類学をはじめ、民族音楽学、映像人類学、歴史人類学、歴史社会学、ポピュラー音楽研究、音楽教育学である。また、調査するフィールドも、日本を含む東アジア、東南アジア、南アジア、アフリカ、南北アメリカと多岐にわたる。現在までのところ、研究会の前半でフィールドワークによる調査を主とする事例研究を取り上げ、後半でポピュラー音楽や

歴史的事例を取り上げる予定でいる。こうすることで、音楽や踊りの実演がじかに知覚されるタイプのミュージッキングの事例研究を基礎としつつ、メディアを介した音楽や過去のミュージッキングにおける身体性の解明を試みる。

以上の方針のもと、2016年度は2回の研究会を行った。理論的な報告としては、野澤が趣旨説明として、ミュージッキングという概念がこれからの音楽文化研究にどう活かされるかの展望を述べた。また、武田俊輔（滋賀県立大学）が、柳田國男が彼の民謡論のなかで、歌が生成するダイナミックな場の重要性を認めていた（その意味でスモールの議論を先取りしていた）ことを報告した。事例研究としては、梶丸岳（京都市立芸術大学・当時）が秋田県横手市の金澤八幡宮で行われている掛唄大会や直会の場における歌唱による相互行為について、野澤が米国の黒人ペンテコステ派キリスト教会におけるサウンドとトランスダンスのかかわりについて、川瀬慈（国立民族学博物館）がエチオピアにおけるザール憑依儀礼の動態を映像作品『精霊の馬』の上映によって、それぞれ報告した。地域やパフォーマンス・ジャンルが多様なだけに、共通する課題をあぶり出すにはさらに時間をかける必要があるが、今後も多様な研究発表に触発された刺激的な議論が期待される。



憑依儀礼ザールにおいて、コレと呼ばれる精霊を霊媒に呼び寄せるために演奏する職能集団のアズマリたち（2004年4月、エチオピア・ Gondar 近郊アゼゾ、川瀬慈撮影）。

### 【参考文献】

- ミズン、スティーヴン 2006 『歌うネアンデルタール—音楽と言語から見るヒトの進化』熊谷淳子訳、東京：早川書房。  
 Nettl, Bruno 2010 *Nettl's Elephant: On the History of Ethnomusicology*. Urbana: University of Illinois Press.  
 スモール、クリストファー 2011 『ミュージッキング—音楽は〈行為〉である』野澤豊一・西島千尋訳、東京：水声社。

### のざわ とよいち

富山大学人文学部准教授。専門は文化人類学。本プロジェクトに関連した論文に、「音楽と身体的人类学的研究に向けて」『文化資源学研究 第10号』（金沢大学国際文化資源学研究中心 2013年）、訳書に、トマス・トゥリノ『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ—歌い踊ることをめぐる政治』（共訳 水声社 2015年）などがある。